静大「ボランティア団体合同新歓イベント」2026 開催！

▸▸▸▸ 企画運営した、学生団体「NextDoor」の3人に想いを聴きました

2026年4月16日に静岡大学静岡キャンパスにて、新入生に向けた「ボランティア団体合同新歓イベント」が開催されました。学内のボランティア団体20団体が出展し、学生135人が参加するイベントとなりました。

このイベントを企画・運営したのが、静岡大学ボランティアネットワーク NextDoorです。NextDoorは「人と人との繋がりが学生生活を豊かにする。」をテーマに、学生サークルや地域活動の支援・交流イベントの企画などをする、静岡大学の学生有志による団体です。2026年2月に「しぞーかわかものアクションアワード」で審査員特別賞・オーディエンス賞を受賞しています。

実行委員のNextDoorメンバーである、西ヶ谷直樹さん（写真前列左端、昨年の実行委員長）、伊藤 利玖さん（前列左から4番目、今回「言いだしっぺ実行委員長」）、名嘉眞 匠海さん（前列右から2番目）の3人に想いを聴きました。聞き手は、イベントを共催した「かけプロ（旧：チャレンジ2030プロジェクト）」メンバー。

出会いと結成のきっかけ

―３人はどんなふうに出会ったんですか？

西ヶ谷　2025年9月末に県内の高校で開催されたイベントに、ぼくたち3人が学生ボランティアスタッフとして参加し、行き帰りの車中で熱い想いを語り合ったんです。当時はそれぞれ別のサークルで活動していて、西ヶ谷と名嘉眞は「学生防災ネットワーク」で、西ヶ谷と伊藤は「スマイル」という団体で一緒に活動していました。

「横のつながりへ」の想い

―どんな熱い思いを語り合ったんですか？

西ヶ谷　そもそも、横のつながりづくりがやりたかったんです。それを伊藤くんにはずっと語っていて。その日のイベントは、「トークフォークダンス」という形式で、これが面白くて静岡大学でも実施することを決めたんです。

名嘉眞くんが中心になって、2025年11月の静大祭のタイミングでトークフォークダンスのイベントをやりました。

名嘉眞　いろいろな相手とお話をする、というスタイルのイベントで。上級生と1年生が、学年関係なく交流できる機会になりました。

西ヶ谷　それと並行して「リーダーの集い」をやりました。各団体の代表や幹部が悩みを抱えていて、お互いの悩みを打ち明けられる関係性や団体同士のネットワークが重要だという問題意識からです。

ぼく自身が学生防災ネットワークの代表を務めた経験や、友人からの悩み相談を受けていた経験から、リーダーの大変さを身にしみて感じていたんです。尊敬する先輩に問題意識を相談したところ、「悩みを抱えている人が全員集まって率直に話し合ったら解決の糸口が見えるのでは」というヒントをもらって、代表だけで集まる会を企画することになりました。

イベントやリーダーの集いを通じて、参加者から「またやってほしい」「新たな視点が得られた」という声があったので、横のネットワーク形成の重要性を体で感じることができました。単発で終わらせるのではなく、団体として基盤を作る方がいいと感じて、

「NextDoor」という団体を立ち上げました。

―横のつながりがないときは、悩みを抱えていたリーダーはどうしていたんでしょう？
西ヶ谷　個人で考えてなんとか解決するか、解決できずに団体が崩れてしまうか、みたいな二択になりがちでした。それ以外に、共有するという新たな視点もあるよ、という風に今回立ち上げたところです。

頼り、頼られる関係をどうつくるか

―さきほど、尊敬できる先輩に相談した、と西ヶ谷さんが言っていたけれど、もともと頼ったり頼られたりつながりの中で活動していたんですか？活動を始めようとする人には、なんでも一人で抱え込みがちな人もいると思うんですが。
名嘉眞　もともと結構一人で抱え込んじゃう人間だったんですが、いろんなイベントの運営側を経験させてもらって、一人じゃできないんだということに気づかせてもらいました。今は人のことを頼れるようになったかなと思います。
伊藤　ぼくもひとりで仕事しちゃうタイプだったんです。でも、ほかの人と一緒にやってみると、やっぱり一人じゃ出てこない案が出るんです。特に方向性に関して。だから、何でもかんでも誰かに頼るというよりは、悩んでるところに対してアドバイスもらって、その案を受けてまた自分の仕事に生かす、というやり方をするようになりました。

―今回の合同新歓イベントは伊藤さんが代表でしたが、どんな運営体制にしましたか？
伊藤　今回のイベントは規模が大きくて、本当に大きいイベントは一人じゃ回らないんだなって思いましたね。総合司会は上手な人に任せて、ほかにも何部屋か教室を使ったのでそれぞれの部屋の管理を誰かに任せたりしました。ぼくがやっているサークルは、ぼくひとりでも運営できるんだけど。今回は、僕よりできる人がいっぱいいました。それぞれの専門分野があって、適任がいるから任せた方がいい、と強く思いました。

―得意なことや強みを持つ人を、意識的に集めたわけではないんですよね？
伊藤　そういう人たちが、団体間の横のつながりに興味を持っていて集まったということだと思います。

―連携の秘訣はありますか？一緒に一つの活動を実現したり、お互いの活動を応援したりできるような、いい関係を築くために。
伊藤　仲がいいこと、距離が近いこと。イベントの最中も、お互いのアイコンタクトで、あれ困ってるんじゃないかなと分かり合える関係に助けられました。いま足りないところを全員が考え続ける。ほかの企画をしたり、雑談したり、なんだかんだ関わり合っているので、距離は自然と近くなります。
西ヶ谷　それに加えて、横のつながりをつくるというビジョンに賛同してくれたメンバーだからこそ、同じ方向を向いて動けたと思います。さらに今回集まったメンバーは、「オーナーシップ」を持つことができていて、イベントがより良い場になるように主体的に考えて動けていた。指示を待つのではなく、それぞれが現場で判断できていました。
名嘉眞　長所短所がはっきりしているメンバーが集まっていたんですが、互いにうまく補い合って現場で動いていましたね。

主体的なリーダーとして成長するには

―主体的に考えて判断し現場を切り盛りできる、というリーダーに学生がなるために、特別な資質は必要だと思いますか？
西ヶ谷　今回の運営メンバーのみんなが、高校時代生徒会長やってたとかリーダーの経験があったわけではありません。それよりも、実現したいという想いが確かにある、という方が大事だと思います。小さな想いでもいいんですが、情熱があれば。ぼくはサークルの後輩である名嘉眞くんを連れて、一緒にいろんなところに行っていたんです。彼はまだ１年生でリーダーではありませんでしたが、でもぼくの背中を見ているうちに、いまでは主体性とリーダーシップを発揮するようになっている。熱い仲間と、夜中までファミレスで語り合うような環境にいたからこそ、ぼくも成長できたしこういうイベントまでたどりつきました。

―名嘉眞さんの名前が出ましたが、自分ではどう変化したと思いますか？
名嘉眞　やってみたい、が行動に移せるようになってきたと思います。行動に移すまでに足が動かなかったり、ほかのことが割り込んできて埋もれてしまったりしていたんですが。今では口に出せるようになってき

て、だからこそ周りの学生たちが協力してくれます。例えば、ぼくは運営においてこの役割がしたい、と言うと任せてくれたり。口に出すことが大事だと思います。

伊藤　ぼくも、ビジョンを口に出す、というのは意識しています。口に出したら、意外と手伝ってくれる人が周りにいて。この人そういうの得意な人だよと紹介してくれたり。

出かけて行って直接つながるということ

―身近な人にビジョンを語るだけじゃなくて、それ以外の人にも伝えるようにしていたんですか？

伊藤　学生が開催するイベントに行って、運営している人ややる気のある人たちに「実はぼくこういうのやろうとしてるんだけど、おもしろそうじゃない？」と持ち掛けてみたりしました。そういう場所には、面白い人が集まってくるから。「そういうのやったことあるよ」という人とつながれたこともあります。

西ヶ谷　伊藤くんは、NextDoorの「関係人口」を増やすのがうまいんです。今の時代はSNSの発信で完結しがちなんですけど、あえて足を運んで出会って広めていく、粘り強い外交をするんです。お互いの信頼関係を、直接会ってつくっているのだと思います。

―初めての人に会って話すのは、もともと得意だったんですか？

伊藤　いや、全然。なんで飛び込んでいくようになったんだろう・・・。一度、駿河湾フェリーを借り切って学生数百人が集まって乗船するイベントを、ある学生団体が企画したことがあって。それに誘われて行ってみたら、すごい面白い人いるなあ、来てよかったなあっていう出会いがあって。こういう人になりたいと思う人に会えたんです。それは、その場に足を運んで顔を出すことでしか会えない人だったので、それ以来直接参加するというのをやっています。

大盛況だった合同新歓イベント、運営者の胸の内

―参加者135人と大盛況でした。感想をお願いします。

名嘉眞　うれしかったのが、一人暮らしを始めたばかりの新入生が、来てよかったと言っていたこと。入学したばかりだし、まだまだ不安もある中だと思います。「お菓子ビュッフェ」という交流の場で、先輩と話せたのがよかったのだと思います。初めて会う先輩と話せる場ってなかなかないので。

西ヶ谷　去年の参加者は68人だったのに、今年は130人以上で、昨年をはるかに上回るクオリティで実現できました。参加団体からも、やってよかったという声をもらいました。キャパを広げるために４教室を同時に使ったのですが、空間づくりに関してはもっとこだわれたと思うので、今後の糧にしていきたいと思います。

伊藤　こんなに大規模なイベントを自分がやったことがなかったんです。12月の終わりくらいから団体に声かけたり協賛集めたり、時間をかけてやってきました。運営メンバーが一人でも欠けたら成り立たなかったな、というギリギリ感が切実にあって、だから仲間を信じてよかったなと思いますし、一番思うのは「感謝」です。みんなで作り上げてきたと思うし、各団体の先輩方も裏で動線誘導したりタイムキーパーしたり受付したり・・・メンバーがいろいろ動いてくれていたからこそ、成功したのだと思います。

これから目指していきたいこと

―それぞれどんなことを目指していきたいですか？

西ヶ谷　今はそれぞれの「団体」がフォーカスされすぎてしまっていると思っていて、「人」に焦点を当て直していきたいです。NextDoorが「人と人との繋がりが学生生活を豊かにする。」というキャッチコピーを掲げているのも、「人」と「つながり」にこだわっているからです。誰かにあこがれて活動を始める、というのも素敵だなと思うので、いろいろ思いを持って活動してる人をインタビューして、インスタのリール動画で流していくこともやっています。

発足2年目のベンチャーみたいな団体ですが、大学生活は四年間しかないので、せっかくだから後悔ないようにしていきたい。誰もがやりたいことを体現できるようにしていきたいです。陰で埋もれてしまっているような小さな意見や、ささいだけど強い想いみたいなものを汲みとって、その熱を高められるような役目をやっていきたいと思っています。

名嘉眞　もともと地域活性に興味があって大学に入ってきました。静岡大学の学生はまだ地域との関わりが薄いと思うので、せっかくこの大谷地区に住んでいるから、学生と地域をつなげられたらと思っています。

NextDoorが運営しているボランティアのグループLINEがあるので、公民館のお祭りなどの情報を流したり、静岡市内のイベントに大学生が気軽に行けるような広がりも見据えてやっていきたいと思っています。
伊藤　団体どうし、人どうしが連携するメリットがいくつかあると思っています。互いに高め合ったり、動画づくりなど技術的なところを学んで一緒にレベルアップしたり。自分が自信を持てることがあれば、活動で役に立てるし「自分がこの活動の場にいてもいいんだ」と一層感じられると思います。
学生のみなさん、ぜひ、一緒に楽しいことをしましょう！小さなことでもいいので、やってみたいことがあったら、気軽に声をかけてくださいね。

静岡大学ボランティアネットワーク NextDoor
西ヶ谷 直樹さん　グローバル共創科学部4年生
伊藤 利玖さん　理学部数学科3年生
名嘉眞 匠海さん　グローバル共創科学部2年生

！「かけプロ」に変わりました　！

「チャレンジ2030プロジェクト」はこの春、名称を変更し、**「かけはしプロジェクト～学生と地域をつなぐ～」**となりました。愛称は**「かけプロ！」**です。これからも、学生と地域とをつなぐために取り組んでいきます。
　静岡キャンパスの共通教育A棟007を、学生や団体、地域の人が交流できる、活動コミュニティの場として、運営しています。運営メンバーとして関わってみたい学生を募集しています。